

大学

夢や志を目標に生きる姿勢を育てる教育と津波被災地

仙台市

島野 智之 宮城教育大学 環境教育実践研究センター

取材日 2013.04.03

野外生物学者（生物多様性）。世界中の研究者と連絡を取りながら持続可能な開発（発展）のための教育（ESD）や環境教育の推進にも取り組む。震災直後は世界各地での野外調査のスキルを生かし、被災者支援のボランティアに加わり、気仙沼市、南三陸町などの被災地を巡り、救援物資の配給等の作業を支えた。

ESDと志教育

南三陸町の教育委員会から、大震災後初めて南三陸町内の全教員がそろって研修会で「持続発展教育と志教育」に関する講師を依頼された。

志教育とは、宮城県教育委員会が震災前から独自に推進している教育の在り方で、子ども達が小・中・高等学校の全時期を通じて、人や社会と関わる中で社会性や勤労観を養い、集団や社会の中で果たすべき自己の役割を考えながら、将来の社会人としてのよりよい生き方を主体的に求めていく教育である（キャリア教育）。小さい時に描いた夢を、高校生まで志として高めていく。「夢と志」ではなく、子どもの頃に持った「夢」を「志」として高めていこうというものだ。

ESD（持続可能な開発（発展）のための教育、持続発展教育ともいう。Education for Sustainable Development）も、社会の中での自分の立場を理解して、社会で自分は何ができるかを考える。持続可能な社会を創るために、私達は何ができるかを考えるのがESDだと思う。志教育も同様な事を目指している側面がある。社会の中で自分ができる事や役割を大事にする教育であり、ESDと根底ではつながっていると考えている。

大震災発生後、支援者は5～6月にかけて疲労のピークがあったが、学校の先生方はさらに夏休みにかけても疲労のピークが残っていた。先生方は非常に疲れていた。そうしたとても大変な中で、志教育や持続発展教育の講話を行なうのは、話にくい部分が多かった。けれども、志教育の中の「夢」や「志」という部分を取り出してみるならば、それは大変な状況にあっても夢や志を見つけて、それを目標に生きていこう、頑張っていこうという姿勢だ。そうした姿勢を持つ事はとても意味があるのではないだろうか。その意味では、志教育も持続発展教育も津波被災地において必要な教育の考え方の1つであるように思う。



大震災後の海岸生態系

海岸生態系は震災前にすでに人間の活動によって破壊されていて、ごく一部にしか良い海岸生態系は残っていなかった。2011年の夏に津波が来た海岸を調べると、分解者の生態系、つまり藻類などを分解するような生態系は戻ってきていた。つまり、千年に1度の津波でも海岸の生態系を根こそぎ破壊する事はなかったと考えられる。

しかしその後、夏に重機を導入し、仮設防潮堤がたくさん造られた。その重機は海岸のごく一部に残されていた、手のついていない非常に良い海岸生態系を根こそぎ破壊する事につながった。今後さらに工事用の機材や重機が入り、防潮堤ができれば、ごく一部にしか残されていなかった良い海岸生態系が根こそぎ破壊されてしまうだろう。それでも、それなりに海岸生態系はできるだろう。しかしとびきり良い海岸生態系は、一度破壊されてしまうと戻ってこれない貴重な生物を含んでいる。

今も定期的に気仙沼・南三陸エリアへ調査に行っているが、海藻が根こそぎ無くなっている。最初は打ち上げられた海藻がたくさんあったけれど、2012年頃から海藻が打ち上げられない。もともと海藻からはじまっている海岸生態系は一旦、縮小状態になっている。このような、ハビタット（生息場所）が残されている場合には、生物達は絶滅

してしまうわけではなくて、また戻ってくると考えられている。津波の後に一度回復したものが、また規模が小さくなり、生態系自体が痩せ細った状態になっているのが現状だ。これ以上工事用の機材や重機が入り、防潮堤を作り上げてしまう事は、生態系から見れば避けていただきたい事ではある。

漁師さん達は「海と生きる」覚悟を持って海と生きている。僕達研究者が常に研究対象の生き物を顕微鏡などで見ていないと分からなくなってしまうのと同じで、防潮堤という遮るものができてしまうと、海の事がわからなくなってさらに危険になるのではないかと、漁師さん達が仰っていた。防潮堤で海を遮る事は海岸生態系の大きな問題を引き起こし、人間の活動にも大きな影響を及ぼす。

非常時のアレルギー問題

高度な障害を持つ、支援が必要な子ども達のためのマニュアルを出版した。医療に近い支援を常に必要とする子ども達が、一切電源が無い避難所などでどうしたらよいかの書かれている。その中でも僕の興味は食品アレルギーにあり、仙台にある「ヘルシーハット」というアレルギー対応食品や自然食品を販売するお店へ取材に行った。社長さんがもともとひどい金属アレルギーを持っていらっしやっただけで、食品アレルギーを持つ子ども達も食べられるものを豊富に取り扱っている。小さいお店だが、全国に顧客を持っている。

震災の時にアレルギーが出て、呼吸困難になったら命にかかわる。震災の後は遠くから、自転車などで食品を求めてお客さんが来たという。皆さん、「命拾いした」と仰って帰られたそう。震災直後にお店を開けた事で救われた子ども達はたくさんいた。今後も、ぜひ頑張っていたきたいお店である。

2年間を振り返って

社会全体を次のエネルギー形態で維持できる社会に切り替えていけたらよかった。あの当時はそんな夢があったけれども、現実的にはなかなかそうは進まない。震災後はもっと世の中のエネルギーがシフトするかと思っただけで、2年経ってもそれほど代替エネルギーへシフトしている現実には多くは見えてこない。ただし、長い目で見れば、いくつものきっかけにはなったと思う。

個人的な支援活動としては、南三陸町のネイチャーセンターを、今後とも支援したいと思っている。震災前にもお世話になっていた。津波で大変な被害を受け、使っていた電子顕微鏡は田んぼの中に転がっていた。2013年になり、やっとプ

レハブの準備室が立ち上がった。今後は震災前と同じように、もしくはそれ以上に県外の人にも来ていただき、志津川の海を楽しんでもらえるよう、震災でどんな事があったのかを含めて伝える場として、ネイチャーセンターが元気になっていくところを支援していきたいと思っている。

また、学生達のサポートをしていきたい。私が顧問をしているサークルでは、のべ120人ほどの学生が、のべ40日間ある仮設住宅に通い、子ども達の学習支援を行なってきた。あるいは子ども達が望む、陶芸教室や星空観察会などを自分達で企画していた。自治会長さんとも連絡を取りながら、地域の夏祭りにも参加させてもらった。

今年は学校が荒れる年になるかもしれないと言われている。阪神淡路大震災でも、2年経ってから学校が荒れたらしい。神戸などから非常にたくさんの方のスクールカウンセラーが応援のために被災地の学校へ来てくださっている。嬉しい事だ。こうした問題も含めて、学生達が主体となって取り組んでいる活動が続けられるよう、サポートをしていきたいと思っている。学生達も仙台で大学間ネットワークを作り、学生サークル同士の連携をとりたいと言っているのだから、実現できるよう応援したい。

